

<特別講演>

初年次教育を活用した学生確保のあり方

山内太地

大学研究者，教育ジャーナリスト

私は大学イノベーション研究所という社団法人を創設し，大学のコンサルティングを行っています。

初年次教育という観点から，日本で最も成功していると私が考えるのは武蔵野大学です。一般教養全体に手を入れ，全学部シャッフルのクラスを作り，哲学，現代学，数理学，世界文学，社会学，地球学，歴史学の7テーマ群を2時限連続のオムニバス形式で指導しています。1時限目は教員が順番に座学を行い，2時限目は大学院のTAや学部生のチュードントアシスタントが入り，グループワーク，ティームティーチング，プレゼンなどを行っています。教員以外の専任職員や先輩学生が1年生のサポートに入る体制は，大阪経済法科大学や埼玉工業大学でも取られており，中退や不登校を精神的な面で防ぐ可能性を高めています。明星大学でも，1年生のゼミでは学部の枠を越えたクラス編成をしています(30人×67クラス)。教員55人が担当し，先輩学生がTAとして「明星大学の良いところを手書きのパネルにする」といった自校教育を行っています。自校の良さに目を向ける教育は，帝京大学でも行われています。

愛知大学地域政策学部の初年次教育にも私は注目してしまして，1年前期が作文法，後期が学習法，2年前期は研究法というように，段階的に大学生にしていく仕組みがうまくいっています。

愛知淑徳大学の初年度教育の極め細やかさは「文系版金沢工業大学」と呼べるほどで，英語，国語，数学の学力テストを新入生全員に受けさせ，一人ひとりの学習カルテを作り，教員が丁寧にアドバイスをしています。このカルテは，プライバシーを守りつつ全教職員がネットで見ることができます。

名門校の行う初年次教育として注目しているのは，西南学院大学法学部です。基礎演習SA，図書館SA，添削SA，勉強会SA，WEB指導SAといった先輩によるチュードントアシスタント制度が充実しており，現状に甘んじることなく初年次教育にも力を入れています。非常に評判が良く，法学部だけではなく，全学部に導入しようとしています。

私は，「能動的な学習習慣を付けて欲しい」「誰かと話したり，人に教えたり，一緒に学ぶという勉強を高校時代からやってください」と高校生によく話をしています。なぜならば，企業が就職で求めるのはコミュニケーション能力，主体性，協調性，チャレンジ精神だからです。これは，「言われたことをやる」だけでは身につかないのです。大学生も高校生同様，「自分で考えて行動する」ことができるかによって，社会で重要な仕事ができるかが決まります。これからの大学生には，語学力や国際性は当たり前として，「自分で研究課題を見つけ，情報を集め，論文を書いて発表する」ことが求められるので，高校生には「アクティブラーニング，問題解決学習あるいは熱心なゼミや研究室があるような大

学を探しましょう」という話をしています。

マサチューセッツ工科大学の1年生は、生物学、物理学、数学、英語のライティングと
いった、たったの4科目しか取りません。英語のライティングが初年次ゼミに当たり、他
は工科大ですからいわゆる基礎的な科目です。例えば生物学は、講義が週3回、大学院生
とのディベートが週2回、月曜から金曜の毎日あります。物理学は、講義が週2回、大学
院生との議論が週1回。数学は、講義が週3回、大学院生との議論が週2回。講義に関し
ては150人もの講義もありますが、大学院生との議論は大体10人規模です。講義と議論
の両方を取らないと、その科目はOKになりません。英語のライティングも、週1回3時
間続けて行い、参加者同士で盛んに議論をしています。イエール大学でも初年次ゼミの他
に1クラス12人位のライティングの必修ゼミがあり、論文の書き方を徹底的に学びます。
こうした海外のトップ校の状況をみると、日本のトップ校の状況が危惧されます。むしろ
日本では、学生募集に苦戦しているような大学で、初年次教育の質が極めて高い。

ではなぜ、そのような大学が学生募集で苦戦しているのか。今、高校現場は学習指導要
領の改正やセンター試験の廃止、そして文科省から急にアクティブラーニングをやれと言
われ大混乱です。しかしこうした状況だからこそ、これまで培ってきたアクティブラー
ニングや初年次教育による的確な高大連携によって、高校との信頼関係をつくり、大学側が
期待するような高校から学生を獲得することができます。

高校側には、「生徒を行かせたい大学と連携すべきだ」と言っています。今までの高大
連携では、模擬講義や学校説明会など、大学が良かれと思って提供するものを、高校側が
一方的に享受してきました。「そろそろこの関係を終わり、まず高校側が自校のポリシー
をしっかりさせてそれに合った大学を選んで、大学側にいろいろ要望していいんですよ」
と高校に言っていますので、大学側も対応していただきたい。

今後の教育改革により、センター試験で56万人位受けているのですが、新しい大学テ
ストではおよそ半分になります。センター試験が無くなり、高校テストと大学テストに分
かれた時に、大学も高校も今より序列化が進むと私は思っています。高校テストに対応し
た授業中心の高校と、新型の大学テストに対応した高校にわかれていきます。なので、今、
危機水域にある進学校は、トップ進学校を追いかけるか、底辺校に行くしかないのです。
そうすると、学生募集に苦戦しているような大学には、これまではわりと入学してくれた
高校の層からも学生が来なくなります。こうした高校とは大学側もパートナーシップを結
んで良い関係をつくり、初年次教育の良さをきっちりPRして、対策を一緒に考えていき
ましょう。

また地方で大変顕著なのは、都会の大学に進学するために高校生が大量流失してしまう
点です。何としてもこれを食い止めたい。就職する生徒が留まってくれることはもちろん
大切ですが、そういう生徒ばかりでは困ります。今後、進学校を対象にした高大連携、そ
して地域連携をやってほしいと思います。地域の持っている豊かな文化とか伝統というも
のを、進学校の生徒ほどきちんと知るべきなのです。地方の大学には、初年次教育を魅力
あるコンテンツとし、地域と高校を巻き込んで、地元の進学校から必要とされる大学に
なっていただきたい。

最後に「結局、初年次教育はどうあるべきか」ですが、当初の初年次教育に比べ、必要
に迫られて行うしんどい状況になりつつあるので、もう一回、「初年次教育というのは受

験生への魅力あるコンテンツに成り得るものだ」という事を認識していただきたい。そして、出来ない生徒を大学教育に適応させるのではなく、高校生から大学生への学び方、質的転換を促すことだという事を高校に知ってもらおう。「やらされる」のではなく、「能動的な学びを喚起する」のが初年次教育ですが、高校生から大学生になって、いきなり能動的になることはあり得ないので、高大連携が重要になります。高校生の段階から能動的な学習習慣がついている学生を入学させることができれば、大学側も楽になるでしょう。このように考えると、初年次教育と学生募集は極めて近い関係にあると思っています。

本稿は、大会での表記題名で行われた山内太地氏の特別講演を、編集委員会の責任でまとめたものである。